

「知ることへのおすすめ」

毛丹青・神戸国際大教授 講演要旨

いま、中国では日本文化専門誌がよく売れている。出版業界では日本にかかわると売れるからだという。それだけのことだ。

書店の外国文学のコーナーで大体 7 割以上が日本の小説などで、ずらりと並んでいる。小職が携わってきた『知日』（2011 年 1 月北京で創刊）と『在日本』（2016 年 4 月上海で創刊）という二刊がある。

日本文化専門誌作りの原則は、中国の読者のために、日本の生の、そして直の実体験を提供することにある。中国人の編集部員がそれぞれ、自分なりの視点で相手を観察している。

中国文化の背景を参照する者、中国と日本以外の国の文化と比較する者、記事の端々から各人の興味の在り方が読み取れる。

日本語で「等身大」という言葉の意味は「あなたと同じだ」ということだ。日本のことを見続け、誇張せず蔑視せず賛美せず、文化の記録の叙述者として、今後の日本への理解を深めるための道をつくっている。

これと同時に、日本の若者たちにも、ぜひ同じ視点で中国を知ってほしいと思っている。

日中の人たちは、お互いの「日常」の中からこそ、よく知り合えるということをおぼえてはならない。

日中間には、観光や流行のように「海面に出ている」見える文化と、理念、道徳、知への欲望などのような「海底にある」見えない文化がある。

政治関係は良いときも悪いときもある海面のようなもので、政治家はそうした状況を利用することがある。私たちが目指すのは静かな海底であり、お互いに知るべき文化は、そこにこそある。

中国では、ソーシャルメディアなどの登場により、日本の小説やアニメなどの人気が高まった。中国の若者は日本文化を知り、自らの生活を豊かにしようとしている。

中国のメディアもこれまでのような一方的な反日型のメディアに対し、ソーシャルメディアを通じネットユーザーが双方向につながるような知日型のメディアが発展しつつある。

日本の若者に期待したいのは、もっと海外に目を向け、出かけて言ってほしいということだ。近年の日本の反省点は、若者が他国の文化のすばらしさを自分たちの知恵にしようとしてこなかったことだ。

日中関係について言えば、互いのことを知り、人と人が強く結ばれば、国同士が悪くなるはずはない。

毛氏略歴

北京大学東方言語文学科卒業後、中国社会科学院哲学研究所助手を経て、1987年、三重大学に留学。商社勤務などを経て、日中両語による執筆活動を開始。来日してから日本各地への旅を続け、「ありのままの日本」を中国の旅行雑誌などに特集記事として紹介。中国各地の大学で「日本と私の日常」をテーマに講演を行うなど、日中文化交流に尽力。

代表作「にっぽん虫の眼紀行」（法蔵館、1998年・文春文庫、2001年）。2011年に日本文化に特化したビジュアル月刊誌「知日」を北京で創刊、主筆を5年間務めた。2016年に雑誌「在日本」を上海で創刊、現在編集長を務めている。